

Title	藏書家白藤として知られたる書物奉行鈴木岩次郎成恭の事蹟
Sub Title	
Author	森, 潤三郎(Mori, Junzaburo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1925
Jtitle	史学 Vol.4, No.1 (1925. 2) ,p.43- 90
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19250200-0043">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19250200-0043</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 藏書家白藤として知られたる

## 書物奉行鈴木岩次郎成恭の事蹟

### 目次

#### 緒言

- 一、成恭の履歴と父祖及び裔孫
- 二、免職の原因
- 三、成恭の年齢
- 四、成恭の性行
- 五、成恭の住居
- 六、成恭及び近親の墓碑
- 七、成恭の編著及び藏書
- 八、成恭の撰文を刻める碑

藏書家白藤として知られたる書物奉行鈴木岩次郎成恭の事蹟 (森)

(四三)

四三

九、成恭の交友

十、成恭の子成夔の事蹟とその著書附孫成虎の事蹟

附 鈴木成恭近親交友略年譜

參考書目

緒言

往年京都に在るの際、藏書家會合の席に於て、予は文化文政の頃江戸の藏書家に鈴木白藤なるものありしことを聞けり。白藤の名は嘗て大田南畝の一話一言に見えたるを想起し、架藏の書を出して之を見るに、卷三十に文化十一年甲戌「鈴木白藤記時事詩」あり、卷三十三に「杏園集已夜迎聲妓阿勝」詩一首と「元日早朝二首」とあり、卷三十六に「鈴木白藤所藏白石著述目」及び「邀月亭叢書目」とあり

○この二書の事は第七節に記す 卷三十七に「擁書城小集詩附白藤詩」あり、卷四十には「宋詩二陳」と題し、宋詩に陳師道字無己后山と號するものと、陳與義字は去非簡齋と號するものと二種あることを記し、その末に

秘書鈴木白藤より文通に

陳后山詩註 十二卷 朝鮮本

五冊

門人 彭城 陳魏衍序

元城 王雲題

天 杜任淵

后山詩集目錄年譜附

跋に弘治丁巳秋九月朔石淙楊一清識

右は珍奇之書之由楓山にても別庫に相貯へ大切にいたし置候品にて御座候 正月幾望  
とあり。斯の如く數卷にその名を見るも、事蹟に就きては毫も記するところなきを以て、如何にもして

藏書家白藤として知られたる書物奉行鈴木岩次郎成恭の事蹟 (森)

(四)

四五

その傳記を知らんと欲し、先づ搜索の端緒を得んがために大日本人名辭書第六版(二)を閲するに、鈴木白藤の名の下に中根香亭の香亭雅談(三)を引くを以て、更に香亭雅談を出して之を見るに、卷上十五丁裏面に

鈴木白藤富藏書又性好寫字凡所見良書莫不手寫往時楓山書庫多抄本不上木者世人無得而見白藤晚爲秘書監日夜從事其所好不出數年鈔書積如山子桃野孫竹圃皆守而不失余在駿日竹圃居近隣屢借覽其書多所益焉白藤古賀侗庵岳丈也故二家書迭相謄寫後略歸一定。

と記せり。人名辭書は「鈔書積如山」までを假名交りに書き下し、「藏書家の名四方に聞ゆ」の十文字を添加せしのみ○人名辭書楓山を嵐山に誤れり

香亭雅談の記事は白藤の性行を知るべきも、予の寡聞なる未だその詳傳のあるのを知らず、且その諱通稱及び年代を定むべき資料を得ざるを以て、これが調査を怠らざりき。

大正元年予は江戸幕府時代の紅葉山文庫の沿革と、その主管者書物奉行の事蹟とを研究せんことを企圖し、關係圖書を涉獵するに當り、武鑑(四)の中文化九年より文政四年に跨り、書物奉行の一人に

牛込山伏町鈴木岩次郎

とあるに注目し、一話一言に秘書、香亭雅談に秘書監とあるに對比し、鈴木岩次郎の白藤ならざるやを疑へり。一日他の所要ありて好古類纂(五)に連載せし武田信賢翁の編纂にかゝる墓所集覽を閲し、牛込區の部に於て左の記事を検出せり。

鈴木白藤 姓は紀名は成義通稱勘十郎幕府の臣御書物奉行を勤む後に御廣敷添番になりて西城へ轉ず西城の君薨せらるる例に遵ひ小普請に入る幾もなく舊職に復す明和己丑年八月十一日歿す年二十九袋町淨土宗光照寺に葬る。

法名齊聖院調譽戒忍居士○この次に香亭雅談を引く前に掲げたるを以て略す

鈴木桃野 姓は紀名は成夔通稱孫兵衛白藤の子なり幕府の臣にして學文所出役を勤む常に讀書を好み世の交際を厭ひ帷を垂て諸子百家の書に渉るされば多識該博なり世に隱君子と稱せらるる自著に反古の裏書といへる和文の寫本數卷ありて家に秘す事柄においては左のみ珍らしき説にあらざれども卷を開き一讀すれば怡悅の條あり或は悲哀の情あり或は願を解き腹を抱ゆるの面白味ありされど此書餘り人間に傳はらず知るもの少し惜むべし嘉永五壬子年十一月十五日歿す年五十三袋町淨土宗光照寺に葬る。

法名觀良院道譽禮信居士

予は之を一讀してその年代墓地等を知り得たるを喜びしも再三熟讀するに及び、(一)年代の予が聞きしと相違すること、(二)通稱の武鑑の記載と異なること、(三)吏徵(六)に従へば御廣敷添番は謁見以下御書物奉行は謁見以上の格式にして、御書物奉行より御廣敷添番に轉ずるが如きはあり得べからざること、

(四)香亭雅談の「晚爲秘書監」の晩字の普通晩年と稱するに較ぶれば、成義の享年の餘り若きに失する

こと、(五) 鈴木桃野の歿年五十三と距離甚しきこと等五條の疑問を生じ、試に年表を取りて桃野の歿年より逆算するに、その生れしは寛政元年に當り、成義歿後二十年を経て出生することゝなれば、成義と白藤とは別人にして、桃野の白藤の子なることは香亭雅談によりて明白なるを以て、或は成義と桃野との間に一人ありて、その人即ち武鑑に見ゆる岩次郎、岩次郎即ち白藤ならんと推定せしも、未だ之を確むる時機を得ず。且つ紅葉山文庫の沿革及び他の奉行の事蹟も、京都に在りては材料を得る事難く、僅に大綱を記するに留め、二年にして一應筆を絶ちたりしが、大正七年歸京以來予は調査を繼續し、鈴木白藤の事蹟に就きても、種々の材料を得、稿を改むること四たびに及べり。茲に先づその官歴より始め、項を分ちて逸事、著書等を記載すべし。

### 一、成恭の履歴と父祖及び裔孫

予が歸京して未だ鈴木氏の菩提所光照寺を訪はざるに先ち、人ありて一紙の拓本<sup>(七)</sup>を示す、その全文左の如し。

白藤鈴木君累遷御書物奉行稱職以顯父母一日謂其婿劉煜曰先人之沒某尙幼未及銘墓常懼先德泯焉今丁五十年忌辰益切悚惕將改立碑紀德請煩子煜謹諾實戊寅之秋八月也按狀君姓紀諱成義孫兵衛君繼配岩田氏所生孫兵衛君沒襲祿拜御廣敷添番轉官西城西城 大君薨遵例入小普請組無幾復舊職明和六年

八月十一日没享年二十九葬城北牛込光照寺法諡齊聖院調譽戒忍居士君性慎密與物無競善畫曉音律娶  
内海氏生一男一女男即白藤君也内海氏守寡銘曰婦守義兒克家壽弗將遺德遐。

文政元年八月

劉煜撰 向陵賀瑛之書

この碑文によりて予が最初の推定の如く、白藤は成義の子にして、書物奉行鈴木岩次郎なること、父成  
義の五十年忌辰に當りて墓石を改修せしこと、母の内海氏なること、女子の同胞ありしこと、精里古賀  
撲の次子小太郎煜○號 同庵が白藤の女婿なること、曩に墓所集覽に白藤として掲げられたるは成義の傳なる  
こと等を知り、調査に一步を進め得たるを悦べり。次で光照寺に詣で、鈴木家累代の墳墓を拜し、同寺  
住職小谷誠順師に請ふて過去帳を閲し、その後同師の好意によりて鈴木家に傳來せる書類の精査を許さ  
れ、白藤及びその父祖、裔孫、姻戚の關係まで、之を詳悉することを得たり。○墳墓の事は  
後節に記述す  
鈴木家に傳來する書類は

一、由緒書

壹冊

享和二壬戌年十二月鈴木岩次郎が學問所勤番組頭たる際に認め、翌三年二月二十九日目付に  
差出し、文化三年九月目付より朱筆を加へて下渡されしもの。

二、先祖書、同姓書付、宗門改證文

壹冊

天保四年三月認めたるもの。

藏書家白藤として知られたる書物奉行鈴木岩次郎成恭の事蹟 (森)

(四九)

四九



三、親類書、遠類書

壹 冊

天保十五年即ち弘化元甲辰年岩次郎七十八歲○表向八十四歲の時認め、小普請支配津田美濃守に差出したるもの、控。

四、親類書、遠類書

壹 冊

嘉永七甲寅年○安政元年閏二月岩次郎の嫡子孫兵衛が小普請支配奥田主馬に差出したるもの、控。

五、親類書、遠類書

壹 冊

萬延二年即ち文久元辛酉年正月孫兵衛の次子五一より支配奥田主馬に差出したるもの、控。

六、白藤書屋藏書目

壹 冊

の六種にして、岩次郎の諱成恭なることは第二號に記され、官歴の詳細と花押、黒印とは第三號にあり。今先づ第三號親類書の初めに記するところによりて官歴を述べ、之に註釋を加へ、次に父祖、姻戚の事に及ぶべし。

小普請組

津田美濃守支配

實子惣領

高 百 俵

本國下總

鈴 木 岩

次 郎

五 人 扶 持

辰 歲 八 十 四

拜領屋敷牛込元天龍寺上ヶ地住宅罷在候

浚明院様御代私儀父勘十郎

心觀院様御廣敷添番相勤候節明和六丑年八月病氣差重候に付跡式奉願置同月廿六日病死仕同年十一

月六日願之通跡式無相違被下置旨於躑躅之間板倉佐渡守殿被仰渡小普請組神尾若狹守組ニ入。

文恭院様御代天明八申年七月廿六日宮城久三郎組之節御天守番被 仰付旨於躑躅之間松平伊豆守殿

被仰渡岩間翁助組ニ入寛政十二申年三月晦日山本文左衛門組之節學問所勤番組頭被 仰付勤候

内百五拾俵高二御足高被下置旨於躑躅之間御老中御列座太田備中守殿被仰渡同年十月六日爲御

手當七人扶持被下置旨堀田攝津守殿御書付ヲ以被仰渡享和元酉年四月廿四日於御白書院御廣縁

鎗術

上覽被 仰付端物貳反拜領仕文化九申年十一月廿四日御書物奉行被 仰付永々

御目見以上被 仰付旨於御右筆部屋縁頼御老中御列座青山下野守殿被仰渡文政四巳年十二月廿

四日

思召有之御役 御免小普請入被 仰付旨於同席御同人被仰渡服部伊賀守支配ニ罷成同廿五日差

控伺候處差控可罷在旨青山下野守殿被仰渡候段伊賀守申渡同五年閏正月十四日差控

御免之旨御同人被仰渡候段伊賀守申渡其後段々支配替天保十五辰年八月廿八日津田美濃守支配

藏書家白藤さして知られたる書物奉行鈴木岩次郎成恭の事蹟 (森)

(五二)

五一

罷成候。

浚明院の十代徳川家治、文恭院の十一代家齊なることは云ふまでもなかるべし。心觀院は奠香録二十(九)日の條に。

心觀院淨池蓮生大姉

上野

春性院

浚廟御臺所閑院眞仁親王姫宮明和八寅八月

とあり。閑院宮家より降嫁されたる家治の夫人にして、その薨去は明和八年八月二十日、葬所は上野東叡山寛永寺内春性院なり。御廣敷添番は吏徴下卷に(六)

御目見以下(中)略

御廣敷添番六十六人組同並打込

番之頭支配 百俵扶持高 御普請懸三人五人扶持 燒火間上下役 (年月日闕く) 始置

同別録下卷に(六)

御目見以下(中)略

享保九年甲辰七月十三日百俵高

と見ゆ。廣敷番は大奥に出入するものを監察する職にして、添番はこれに附屬す。板倉佐渡守は老中

諱を勝清といふ。天守番は天守臺を掌る職にして、(六)吏徴下卷に、

御目見以下○中略

御天守番四十人

頭支配 百俵扶持高 正月六日御目見 躑躅間上下役 寛永十六年己卯閏十一月七日始置

又同書別録下卷(六)によれば、享保九年甲辰七月十三日百俵高に定められ、正月六日御目見仰付らるゝこと

いなりしは寛政三年辛亥二月二日よりなることを知る。松平伊豆守は老中諱は信明。學問所勤番組頭は

吏徴上卷に、

御目見以上○中略

學問所勤番組頭貳人

林大學頭支配 百五十俵高 御手當七人扶持 焼火間 寛政十二年庚申三月廿九日始置

同別録下卷(六)に

布衣以下御目見以上○中略

學問所勤番組頭

寛政十二年庚申三月廿九日始置二員黒澤正助鈴木岩次郎百五十俵高御勘定次席

文化三年丙寅三月御手當七人扶持

藏書家白藤として知られたる書物奉行鈴木岩次郎成恭の事蹟 (森)

(五三)

と見え、文恭院殿御實紀卷二十八、寛政十二年三月三十日の條に。

右衛門督方小十人格黒澤正助、天守番鈴木岩次郎學問所勤番組頭命せらるこれ新置の職なり座班は勘定の次たるべしとなり。

とあり。太田備中守は老中諱は資愛。堀田攝津守は若年寄諱は正敦。御書物奉行は吏徴上卷に。

御目見以上○中略

御書物奉行

若年寄支配 焼火間 貳百俵高 御役扶持七人扶持 同心廿一人 寛永十年癸酉十二月廿日始置

と見ゆ。青山下野守は老中諱は忠裕なり。

書物奉行に關しては、別に「紅葉山文庫書物奉行」と題して詳述するところあり、他日世に公にせんことを期す。

右の親類書によりて白藤即ち鈴木岩次郎成恭は、天守番、學問所勤番組頭を経て書物奉行となり、十年間在職せしこと武鑑の示すところと一致することを知るべし。

鈴木家書類第一號乃至第五號により、その系譜を作成して次に示す。

○始祖某

與四右衛門 徒士、徒士押  
寛文、八、七、四、死

二世某

與四右衛門 徒目付、關所物奉行  
寶永三、六、二、死

三世某

孫兵衛 廣敷添番、二丸表添番  
寛保二、八、二九、死

四世成澄

孫兵衛 廣敷添番、天守番  
寶曆七、五二、死

五世成義

勘十郎 廣敷添番

妻岩田昌慶女 明和六、八、一七、死

六世成恭

岩次郎 天守番、學問所勤番組頭、書物奉行  
妻多賀谷源藏女

七世成夔

孫兵衛 學問所教授方出役  
妻遠山繁十郎女

某八之助

中西彌右衛門ノ嗣

松儒者古賀小太郎煜妻

成龍彦太郎

八世成虎五一

開成所翻譯筆記方出役

龜四郎

又姻戚の重なるものを擧ぐれば次の如し。

父 方

一、祖 父

一、祖 母 松平肥後守醫師

一、父

養父私曾祖父鈴木孫兵衛死  
實父私曾祖父高橋淨閑死次男

鈴木孫兵衛

私曾祖父

岩田昌慶死娘死

私祖父鈴木孫兵衛死惣領

鈴木勘十郎

藏書家白藤として知られたる書物奉行鈴木岩次郎成恭の事蹟 (森)

(五)

五五

一、母 御先手土岐左兵衛組與力之節

一、妻 御先手曲淵隼人組與力之節

一、惣領 御目見仕候 學問所出役

一、娘 御儒者

一、孫

一、孫

一、孫

母 方

一、祖 父 御先手土岐左兵衛組與力之節

一、祖 母 御先手松波六右衛門組與力之節

縁 者

一、舅 御先手曲淵隼人組與力之節

内海五左衛門死娘死

多賀谷樂山俗名源藏死娘死

鈴木孫兵衛

古賀小太郎妻

鈴木彦太郎

鈴木五私手前罷在候

古賀謹一郎

養父私曾祖父内海八郎左衛門死  
實父私曾祖父吉田與四郎死

内海五左衛門死

内海八郎左衛門死娘死

多賀谷樂山俗名源藏死

二、免職の原因

成恭は前掲履歴にある如く、文政四年十二月二十四日「思召有之御役 御免小普請入」を命せられ、

猶翌日には差控を命ぜられ、籠居すること約二ヶ月に及べり。右の名義を以て職を免せらるゝは、何等か當局者の忌諱に觸るゝ行爲あるに因るものなり。

成恭免職の原因に就ては未だ的確にその真相を傳ふべき資料を得ずと雖も、山崎美成の海録卷十九の第二十六項に「鈴木白藤の詩」と題し、免職當時詠するところの詩と、美成が贈れる詩とを併せて掲載せり。

忽逢嚴譴臥山丘

夢裡風塵二十秋

幸喜蕭然燈火下

敲門弔慰舊詩游

自從頑質混冠巾

迂濶寬情要保人

還恨保人情未徹

却爲烽蠱螫斯身

陵谷何疑忽變遷

升沈渾可付蒼天

唯憂堂上皤々老

依此愁懷損鶴年

殘臘俄逢此不辰

閨門日日負芳春

世途艱險眞堪怖

養虎牢中反嚙人

忽逢霜臺上咎彈

罪軀幸喜政刑寬

皇天雨露恩光渥

未辱坐朝流內宮

藏書家白藤として知られたる書物奉行鈴木岩次郎成恭の事蹟（森）

（五七）



右鈴木恭通稱岩次郎號白藤

鈴木白藤免秘書監入散官贈

窺見蘭臺中秘書

風流罪過思何如

自今須養閑居拙

日日潘園樂御輿

この雙方の詩を讀みて香亭雅談の記事に想到すれば、秘密主義を尙ぶ徳川時代にありて、紅葉山文庫の秘書を筆に任せて謄寫せしを以て、貶黜せられしにあらざる歟。若しこの想像の如くならば、近藤守重が書物奉行在職の際、筆禍によりて大阪弓奉行に左遷せられし如く、兩者殆んど時を同じくして書物奉行を勤め、同じく筆禍によりて罪を獲、小普請入を命せられたるも同年なるは奇縁といふべし。

近藤守重は文化五年二月晦日小普請方より書物奉行に任じ、文政二年二月三日大阪弓奉行に遷り、同四年三月勤方不相應の故を以て免職せられて小普請入を命ぜらる。鈴木成恭は書物奉行に於て八年間の同僚たり。守重左遷の原因に就きては二説あり、一は守重日夜紅葉山文庫の圖書を涉獵し、その参考に資すべきものは悉く謄寫し、一晝夜に七冊の書を寫すに至る、或は之を以て守重を讒毀する者あり、これ左遷の原因なり。二は外蕃通書の著に原因すまなすものにして、家康以來外國關係殊に幕府の外交政策に關しては文書の徴すべきもの甚だ稀なり、これ寛永鎖國の令ありてより故らに其の文書を湮滅せしによるといふ。然るに守重外蕃通書を著はし、家康以來の政策を紅葉山文庫の秘書によりて明白に記述し、之を幕府に獻納したるが爲め、幕府は陽に銀を賜ひて之を賞したれども、實は之を喜ばず、遂に轉任を命ずるに至りしなりといふ。原因を前者まなせば、成恭も同様の運命に遭遇せしものなるべし。

三村清三郎氏その所藏の短冊中に、大田蜀山が。

いかほごに波のぬれぎぬきするとも

もとよりかたき岩次郎ごの

と詠じたるものありと教示せられたり。これまた成恭が免職後贈りたるものなるべし。

### 三、成恭の年齢

天保十五甲辰年記載の親類書に「辰年八十四」とあるも、先祖書に「明和六丑年十一月六日父勘十郎跡式被下候旨云々」とある明和六年の傍に「三歳官年九」○九の字朱書と書するを見れば、その生年は明和四

年に該當し、天保十五年には七十八歳となり、八十四は官年なるを知る。又海録卷十八(二一)の第九十六項に

「同庚會」と題し、松平冠山、岡本花亭、鈴木白藤、大岡雲峰、大窪詩佛、牧園第山の六人齡を同じくするを以て相會せしことを記し、白藤の下に九月十六日と註せるはその出生の月日なれば、成恭の誕辰は明和四年九月十六日なること明白なり。

### 四、成恭の性行

成恭の性行につきては、香亭雅談の他、淺野梅堂の著書寒築瓌綴卷之四(二二)に記するところ、その面目を見るが如くなれば左に掲げん。

白藤鈴木悞軀幹魁梧老テ尙健啖馬將軍ノ風アリ矯捷ニシテ斤斗ヲ能セリ和漢ノ史ニ精シク治亂興廢忠臣勇將ノコトヲ譚ズル聲々可聞旁稗史野乘ヲ好テ多ク古書ヲ藏ス雜劇院本ニ至マテ貯サル處ナシ書ヲ鈔スル敏速ニシテ一日數十紙ヲ寫ス嘗テ温史ノ不足本ヲ得タリ人アツテ其ウチノ數冊ヲ乞テ彼カ闕ヲ補ントスルモノアレハ慳スシテ是ヲ予テ自ラ鈔シテ其闕ヲ填スカクスル事每度ニシテ終ニ温史全部ヲ自鈔ス性儉齋尺牘ノ紙ハ菓子ノ包紙ノ類ヲシハヲ杼シテ用請取書ハ明リ障子ヲ切張セシ古紙ヲ用ヒ名刺ノ札ヲハ机ノ下ニ挿テ人ノ藏書ヲ借モノアレハ札ノウラエ書目ヲ書テコレヲ壁ニ黏シ出入ノ證トス人ノ對話スル時ハイツモ反古ノ端ニテコヨリヲヨリテ居ル夢蕉ト云日記ノ如ク其時ノ語談ヲ有ノ儘ニ書シルシタル隨筆一年ヲ一冊トシ文化十三年ヨリ筆ヲ起セシモノ數十冊アリ其料紙ミナ書狀ノ封シ紙年玉ノ上包紙ナトヲ裏カヘシテ短キハツキ足シ丁寧ニ打唾シテ寫セルモノ也カクノコトク吝嗇カト思ヘハ人ニ物ヲ贈ルナトハ腆厚ナリ市野三治ナルモノ正平版論語ヲ藏板ニセシヲ一部ヲクリケルニ一方金カ謝トシテ遣シケルカ後ニ本屋賣リ一方金ナリトキキテ跡ヨリ貳銖ヲ増シ饋リケルナトノ事アリ己レ而已齋ナルニ非ス人ニモ耗失ナカラントセルナリ其嗣東野克儉德ヲ守リ家道ヲ墮サス書ヲ善シ詩文ハ乃父ニ勝レリ博士トナリテ歿ズ戲ニ寫肖ヲナス甚傳神ノ妙アリ。

## 五、成恭の住居

成恭往居の地は親類書の始めに「拜領屋敷牛込元天龍寺上ヶ地住宅罷在候」とありて、その山伏町なりしことは武鑑に示すとこなるが、成恭の女婿古賀焯の兄熹○穀堂が「邀月亭記」と題して、成恭邸内外の景地を叙せし文章、その「穀堂遺稿抄」に收めらるゝを以て、参考のため左に引用すべし。

潜窩文章卷三○穀堂遺稿抄

記

邀月亭記

我家大人自藩臣升諸大朝則以其長子熹嫡孫承祖留仕藩以其季子焯爲嗣於此學校主事鈴木君女女焯云熹以藩臣從東觀之駕得見君於大人所歎崎歷落不脩邊幅開懷善譚自開國至今日典故事蹟譜牒史乘傾夥纖屑綜核辨晰莫不一如指諸掌聽者各鑿其意熹業已爲吏愴乎時務每歎然自慙思從君受教虛往實歸而不可得也乃屢附便教君不靳回教惠以帳中之秘舉皆藩臬郡縣所未曾有也蓋君愛士之心不問遐邇貴賤而熹又辱通家之誼得以有此也日者君復以書來命熹記其邀月亭者熹已有求於君乃雖不嫻於文何敢辭焉所謂亭者熹未嘗一觀之据書所稱君居在牛門修驗巷勝國時北條氏驍將牛氏居焉故得名自君曾祖君賜宅於此百二十年未嘗罹災江都善火踰百年免災亦一希觀也亭北有小濱侯邸中有寺侯之祖先閣老空印時大猷大君嘗游于此使僧澤庵書春風得意馬蹄疾一日看盡長安花之句又賜親書長安字爲扁額蓋孟郊以其躁大君以其快英雄寒士境同意異可以見矣空印枋國之績在口碑此不復詳西南

曰佐渡原是本多佐州正信侍 神祖帷幄籌畫之奇人比之陳平而後嗣不淑其宅瀦矣其南睨尾邸邸傍有淨瑠璃阪世所傳源牛若與淨瑠璃姬相會處又傳昔者與平氏臣與平源八未冠復讎於此事在稗乘可徵也其東有赤城神祠亭之地不過數十弓無復壞詭之觀而蕭閒僻靜忘其在都下侯邸之林竹鬱茂借爲己有東邀月出之光則爲絕佳君好學藏書頗富少壯講武最善使槍上試受賞家藏古刀三口長槍一幹皆國工所製按鈴木氏系出紀州藤白村源義經臣鈴木兄弟俱以忠勇著稱君蓋其裔故別號白藤夫江都之大燾不足以盡其一二而勢利豪華四者足以概之人之爭趨都下亦不過爲四者所使已耳於斯時對茂林邀明月悠然自得心與天壤俱而冷視世之膠膠擾擾者一何快哉矧文武兼資奉職匪懈攬古今興亡盛衰之由慨然弔二相於九京思忠君於曩祖文之以禮樂進之以仁義君之志其在斯歟其在斯歟西鄙小人不足以知君然一斑片羽旣窺而睹之是以敢妄言而不辭若其詳則待再游之辰登君之亭受君之教而更記之又申之以詞曰。

牛門歸亭之幽竹如篔簹遠鬱攸素月哦顙秋風憂玉唱若酬瞰彼原臯其丘心悱惻弔前脩美人逝烈士休紹乃祖善貽謀文華國武禦仇內不疾亦何求歌以矢庶無尤。

嘉永四亥冬新鑄、安政四丁巳年改の江戸切繪圖の中、市ヶ谷牛込の部に、山伏町と裏山伏町とを通ずる道路の、西南の角屋敷に鈴木と記せるは、即ち成恭の邸宅にして、之を邀月亭記載するところの地名と對照するに方位も亦相當せり。

## 六、成恭及び近親の墓碑

鈴木家の菩提所光照寺は牛込區袋町に在り、市電牛込肴町停留場より神樂坂に向ひ進むこと少許、増田洋品店と淺井小間物店○現今村松時計店支店なるとの間を南に折れ、西に屈曲せる坂を登れば、南側に道路より引入りて寺の石門を望むべし。本堂前より左折して墓門を入り、三側目の筋を西に向へば直に鈴木家の墓域あり、四個の墓石北面して並列す○假に甲墓域と名付く西端にあるは成義の墓にして、高二尺四分、幅七寸八分、厚五寸七分の棹石の正面家紋（丸の内に木字）の下に「鈴木勘十郎紀成義暨配内海氏墓」と二行に大書し、他の三面に曩に拓本を獲たる古賀煜の碑銘を勒せり。予はこの墓を拜する際、最下の墓石に文字あるを認め、苔土を拂ひて之を讀むに、成義の配内海氏の事にかゝり、同じく侗庵の撰するところなるを知れり。

白藤鈴木君清徳碩學爲時所崇信而實本於内海孺人之誨云孺人五左衛門君之第三女妣内海氏性嚴毅既嫁年二十有五而爲孀治家井々有條緒于時姑眞月孺人猶存甃不能行動必待人扶而孺人所生女纔八歲子甫三歲即白藤君也而瘦弱善病孺人事姑育子女拮据綦艱眞月孺人之垂歿也拜孺人曰吾○以上北面平素以痿蹙煩汝扶將泪羅篤疾汝就養尤至非謝可罄所冀吾子吾孫師汝孝謹耳以可以見孺人操行矣孺人雖酷鍾愛二子教督弗懈白藤君年甫十餘時丁安永之季風習頗頽靡競以遊蕩爲尙而孺人獨命君晝講武夜習字誦

書史稍怠則立加譙譴有親眷家女年長於孺人者嘗箴之曰汝所○以上東面生止一男且雖幼業已承家爲主加旃性夙多病萬一勛勵致天悔奚可追幸少見寬恕也孺人曰否々夫遊閑浪蕩以送百年所謂醉生夢死者可耻之甚也死生有定命疆弱本於天稟非由怠與勤少年輩安可任其佚情乎其人不能答而去孺人好讀書稗史野乘不暫釋手年躋八旬精爽聰明不少喪能燈前閱蠅頭字又○以上南面九年嬰疾遽然而逝實天保癸巳十二月四日也合葬于城西光照寺勘十郎君墓法諡善種白藤君爲予岳父故聞孺人行誼爲確文曰教成子承孝緒醮不再持門戶七十稔守貞苦婦道盡詎愧古

天保五年六月

紫 溟 古 賀 煜 撰

孝 子 白 藤 鈴 木 恭 建

孫 桃 野 鈴 木 夔 書○以上西面

之を觀れば成義の妻内海氏は早く寡婦となり、痿蹙の頑姑に事へ、幼弱の子女を擁して苦節を守り、遂に姑をして孝謹に感謝せしめ、兒をして博學多識ならしむ、眞に婦女の龜鑑と稱すべし。

成義の墓の東にある二墓の一には、表面に三個の戒名、没年月日を記す。

林專院心譽妙好大姉 元文四未年  
五月十六日

瀝光院日譽良然居士 寶曆七丑年  
五月初二日

眞月院淨譽澄心大姉 安永五申年  
七月三十日

中央は成恭の祖父成澄、右方はその先妻某氏、左方は繼妻岩田氏 ○親類書に松平肥後守  
醫師岩田昌慶娘あり 即ち成義の碑文に見  
ゆる眞月孺人なり。

その二の表面に

咸勝院然譽暢順居士

眞證院妙實日修

右側に

寛保二壬戌年八月廿三日

鈴木氏

左側に

享保廿乙卯年十一月三十日

と刻するは、即ち三世孫兵衛某夫妻なり、最東端に表面家紋の下に、

鈴木岩次郎紀成恭

暨配多賀谷氏之墓

とあるものは白藤夫妻の墓にして、棹石高三尺二寸六分、幅一尺二寸三分、厚一尺あり。他の三面に何

藏書家白藤として知られたる書物奉行鈴木岩次郎成恭の事蹟 (森)

(空)



等の文字を刻せず、却て父成義の墓に二個所まで「白藤鈴木君云々」を以て起る文あるを以て、その全文を讀まざるものは、成義を以て白藤と誤まるなきを保し難し。現に東都墓癖家の最たる武田信賢翁すらも、後日白藤の成恭なることを知られたるも、墓所集覽編纂當時は成義と誤まりたる由予に語られたり。

成義の碑文を書せる向陵多賀谷瑛之は、遺族の手に成れる孫兵衛成夔の履歴に叔父とあれば、成恭の舅多賀谷源藏○親類書に樂山源藏あり樂山は號ならんの子なるべし。大日本人名辭書に鑒定便覽、續墓所一覽を引きて、瑛之字は伯華、通稱は貞吉、向陵はその號、江戸の人にして書を以て知らるとあり。

鈴木家の墓地は別に第二側の西に一區を劃し、數基の墓石あり。○假に乙墓域名付く

淨光院傳宗立意居士

寛文八年戊申七月四日享年八十三

とあるは一世與四右衛門。表面中央に

春光院誓譽超哲直行居士

左右に「寶永三丙戌年」「七月二日」と分書せるは二世與四右衛門なり。表面家紋の下に

鈴木孫兵衛紀成

夔暨配遠山氏墓

とあるは七世桃野及びその妻にして、右側面に

觀良院

嘉永五年六月十五日

亮池院

明治廿二年四月廿五日

と刻す。三角形の自然石に

鈴木彦太郎紀成龍墓

背面に

山寺秋色

葉々霜乾不自持可憐終被<sup>(缺)</sup>風吹

秋光又作隔年客彷彿人間生別離

嘉永五年壬子十一月十日卒

享年廿二

とあるは成夔の長子。表面に

嚴光院鈴木成虎

之墓

慈雲院小川辰子

藏書家白藤として知られたる書物奉行鈴木岩次郎成恭の事蹟 (森)

(七)

左側面に

成虎明治廿九年十二月十二日

配辰明治三十年一月二十九日

とあるは成夔の次子八世五一なり。

以上墓碑の文字を列擧すること繁に失するが如くなれども、一昨十二年九月一日の大震災により、成義、成恭、成虎三墓の他は悉く倒壊或は折損したるが故に、乙墓域を廢し、成虎夫妻の墓を甲墓域成義と成恭との中央に移し、以前とは體裁を異にせる爲め、特に記載し置くものなり、讀者之を諒せられよ。

墓碑を調査し終り、更に光照寺過去帳を請ふて披閱するに、天保四年の條に成義の配内海氏の法號「善種院詣室徹性大姉」を掲ぐ。嘉永四年の條に。

十二月六日

仁信院義譽禮智居士

鈴木岩次郎事

天保八年の條に

四月廿日

智願院信譽妙入大姉

鈴木岩次郎妻

とあるは、即ち成恭及びその配多賀谷氏の没年月日と法號なりとす。第三節に記せし生辰の明和四年より推算すれば、成恭の享年八十五歳なることを知るべし。

七、成恭の編著及び藏書

東京市中公私の圖書館に於て、江戸時代殊に徳川氏に關する資料を收藏するは、舊紀州藩主徳川侯爵家經營の南葵文庫に如くものなきを以て、予は屢同館を訪ひ、一日館員高木文二郎氏に告ぐるに白藤の事蹟調査の事を以てせしに、同氏は文庫保管にかゝる勝海舟遺書の中に鈴木恭隨筆あることを教示せられたるにより、請ふて借覽するに、その目録左の如し。

鈴木恭隨筆 四十四冊

人物部 二十四冊

烈祖一冊 豐太閣一冊 織田一冊 加藤、木村、眞田、明智、毛利一冊 細川、前田、伊達一冊 松平豆州一冊、本多、井伊  
榊原、福島一冊 本多正信、酒井忠勝、板倉重矩一冊 本多錄補遺一冊 慶元以來人物一冊 秀雅百首一冊 人物十三冊

人事部 一冊

文房部 三冊

藏書家白藤として知られたる書物奉行鈴木岩次郎成恭の事蹟 (森)

(六)

繪事部 二冊

書畫部 二冊

詩稿 一冊

侗庵非詩話 一冊

白河源公追蘇詩 諸友詩合 一冊

典籍部 四冊

紫文翼 二冊

訓蒙 一冊

三都御成由來并在番始之記 一冊

國雅 北野法樂百首附爲綱公和歌合 一冊

内容は主として雜書の抄録にして、國雅の卷尾副葉に、

天保十四癸卯年八月廿六日釘裝

と書するを以て、その輯成年代も大略推知し得べし。

帝國圖書館に鈴木叢書(二六)十四冊を藏す。卷首に友人饗庭盈の序あり。

余友鈴木士敬瑰偉士也、講學余暇、攜撫天慶年間紀實之傳佚於野者、蒐輯爲帙、目之甲集乙集、別

其編次也、我邦王綱既絶、政出武斷、足利氏失其鹿、群雄逐之、割據都邑、車不同軌、方是時乎、  
奪<sup>(缺)</sup>威柄於彎弓持矢之人、翰墨之士、事筆研者、厯々如曙星、其世變治亂之迹、可徵於今者、殘楮  
片卷尙可寶惜也、至我藝祖之龍興、關原觀兵期得、譬猶太陽初出、魑魅魍魎、潛匿其形、鞞囊以來、  
寰內寧靜、今茲二百年矣、文物之盛、莫過於當時而史官闕焉不備者何也、雖有藩翰之譜、亦不具修  
史之體、且期速成、語焉不詳、擇焉不精、有似婉而曲者、有似簡而泛者、朱彝尊所謂明初修元史、  
失之速成者也、未可謂之濼朝盛典也、乃士敬慨然奮發、有是舉也、薈萃群籍、或書英傑之手抄、或  
成遺民之私記、在朝則太田飛州之記<sup>(不明)</sup>、在野則江村專齋之漫錄、後之<sup>(不明)</sup>者僭者妄者、皆不入其選也、  
取舍確正、存其醇者、以備佗日史官之裁擇、乙集垂成、徵余文辨卷首、士敬之於我、莫逆之交也、  
義不得峻拒、書數語於簡端云、嗚呼足利氏之季世、其亂極矣、亂臣賊子、虎踞龍蟠、篡弑戰爭、縱  
橫天下、人皆有豺狼之心、而罕見仁義之性者何居、非性使然也、習相遠也、士敬跋扈亦幾、嗚呼更  
舉一毛端、問之士敬也。

文化三丙<sup>(寅)</sup>年正月

饗庭 盈 識

内容は即ち天正より慶長に渉る左の軍記三十二種を收め、

第一冊至第二冊 古老夜話

第三冊 水野左近一代武功覺書 本多越前守書上 北條安房守書上長湫合戰 長久手或說

藏書家白藤として知られたる書物奉行鈴木岩次郎成恭の事蹟 (森)

(七) 七一

第四冊上下 武功實錄

第五冊 古戰談話上

第六冊 古戰談話下 細川家大阪陣控 世上雜談

第七冊 軍中士之心得覺書 川中島戰之記 志津ヶ嶽合戰小須賀九兵衛話

第八冊 越國內輪弓矢老師物語聞書 近藤氏書上毛利家様子 前九鬼長門守守隆公御働拔書 清

水長左衛門尉平宗治由來 岩崎記

第九冊 水谷記 水谷蟠龍記 有吉家代々覺

第十冊 武田滅亡記 南部根元記

第十一冊 壽齋記 眞田家臣覺書 山邑記

第十二冊 眞田軍功家傳記 豆州様御出之節御話覺書

第十三冊 依田記 大聖寺城落去并淺井繩手迫合之事 首帳 茗話

第十四冊 藤堂高虎息高次へ遣ス文書 同家之舊臣戰功美事書出之寫

卷尾に「大尾 全十四本 文政十一子年秋大成」と朱書し、全冊「東壁圖書府」と柱書せる草色野紙を用ひたり。

予は又下谷御成道の古書肆文行堂に於て、文學士幸田成友氏が成恭の自抄にかゝる「楓山書倉邸抄」

に淺野梅堂の識語あるものを所藏せらるゝ由を聞き、幸田氏を訪ふて借覽を請ひしに、同氏は秘藏の珍籍なるに拘はらず、快諾せられたるを以て、歸宅後之を熟閱するに、半紙版黄表紙和綴にして題簽に。

### 楓山書倉邸抄

文化十二年乙亥四月八日驢恭抄本

と墨書し、綴目の方下部に漱芳閣叢書料「六十五」と記せる小紙片を貼付するを以て、淺野梅堂の蒐集にかゝるものなること、又表紙に墨書するところによりて、藏書家故中川德基翁より幸田氏に贈られたることを知る。卷首副葉に。

### 駿河御庫本目録

御前本目録俗稱十七部

被進御本目録俗稱二十二部

### 御本日記附注

と書す。駿河御庫本とは徳川家康が駿府城中に設けし文庫の書籍を、その薨後林道春信勝が目録を製して江戸紅葉山文庫に移せしものにして、當時その目録を「御本日記」と云ひ、書物奉行近藤守重之を考證したるものを「御本日記附注」と稱す。御前本目録とは家康、秀忠、家光、家宣の座右に備へし書十七部の目録、被進御本とは初め慶長十九年七月家康より秀忠に贈りし書籍三十部あり、寛政十年十一月



林大學頭銜の献言により文庫を點檢して二十二部現存することを確め、爾後之を貴重書扱ひとなせるをいふ。次の御本日記附注の卷末に「文化十一年甲戌正月十一日御書物奉行近藤守重記」と書せるが、流布の寫本には「文化十二年乙亥四月十七日」とありて、多少字句の異なるところあるを見れば、流布本はこの以後訂正を経たるものなるべし。

・御本日記附注の次に左の六通の文書を掲ぐ。

御書物校正之儀ニ付奉伺候書付

御文庫御書物取扱方奉伺候書付控

御本取扱名目之覺

御本目錄

御前本ニ準ジ取扱可申品々覺

御書物御手入ニ付奉伺候

右何れも「子七月」付にして書物奉行近藤重藏、鈴木岩次郎、高橋作左衛門、夏目勇次郎の名を署せり。これを文庫の記録に依りて案ずるに、文化十一年甲戌八月十五日文庫書目重訂の命ありしを機とし、先づ書籍の用不用を分たんことを上申し、十二月十五日許可せられ、十三年丙子七月八日書物奉行より文庫書籍取扱方につき右六通の伺書を呈せしものなり。卷尾淺野梅堂の識語は左の如し。

此書は鈴木岩次郎白藤先生の手書にして近藤守重が有文故事を編書せし藍本なり。右文故事は塾生の手になりて守重は監閲せしのみなれば此書に抵觸せしところあるなり

蟬 癡 識

因に記す淺野梅堂の漱芳閣叢書料三十二冊は帝國圖書館に藏せらる○現今合本十冊とす明治三十五年九月書肆淺

倉文淵閣より購入するところにして、毎卷故内藤恥叟翁の印を捺す。その中に「楓山書倉邸抄」を收めざるを以て想ふに、既に内藤翁の手に入らざる以前に中川翁に歸せしものならん。その中に邸抄に接續すべき資料あり、即ち原題簽に「秘書監上疏」○今其上に紙を貼りて漱芳閣叢書料二十八と墨書せりと書し、表紙體裁とも邸抄と同一にして、綴目下方の小紙片には「漱芳閣叢書料六十四」とありて、その内容は

金澤文庫本取扱之儀ニ付奉伺候書付

慶長植字版本取扱之儀ニ付奉伺候書付

慶長植字版出所書付

の三種にして前二者には書物奉行四人の署名あり。後者は近藤守重が第二の文書に附して呈せしもの三通とも「子十二月」附にして、邸抄所收六通の文書に遅ること五ヶ月とす。この九通の文書は予の「紅葉山文庫と書物奉行」の有力なる資料なり。

成恭の編纂書にして予の寓目せしものは上記の三書なるが、一話一言卷三十六に

藏書家白藤として知られたる書物奉行鈴木岩次郎成恭の事蹟 (森)

(七五)

七五

## 鈴木白藤所藏白石著述目

## 邀月亭叢書目

の二項ありて、前者は新井白石の著述にして成恭藏書中にある書名を輯めしもの、後者は甲乙丙の三篇に分れ、甲篇に三十種、乙篇に三十種、丙篇に十種の軍記類を收め、中には鈴木叢書と重複するものも見えたり。

第四節に引ける寒檠瓌綴の記中に見ゆる「夢蕉ト云日記ノ如ク其時ノ語談ヲ有ノ儘ニ書シルシタル隨筆」に就きては、早稻田大學の市島謙吉氏嘗て圖書館雜誌第三號及び第四號に「近藤正齋の半面」と題し、寺田望南氏より贈られたる夢蕉録の拔萃によりて記述されたる始めに、

其の本の標題は夢蕉録と云ふて二十冊ばかりの寫本で其の原本は高等師範學校に藏してあるそう  
な云云。

と説明せられたるを以て、一たび知友相見香雨君に託し、同君は更にその友人に依頼して東京高等師範學校圖書館を搜索し、再び濱野知三郎氏を煩はせしも、並びに不明なりとの回答に接し、予は市島氏を江戸川の邸に訪ひ更に親しく高等師範學校に赴き、來意を述べてその搜索を請ひ、同校圖書館主事は目錄及びカードを檢閲せられしも共に徒勞に歸せり。若しこの夢蕉録の原本或は抄本の所在を知らるゝ諸賢は、予に通知せられんことを切望す。

成恭の藏書に就きては、香亭雅談に、

壬申歲○明治五年余○中根香亭

自岳陽復東還經二三歲竹圃亦東曰倉卒上途故舉藏書委諸學館余請借其佩文韻府竹圃爲我郵致之居無幾學館失火鈴木氏三世藏書盡成灰燼矣獨佩文韻府以在吾家得免其厄焉蓋學館石造號曰無火患當時吾家在市井間夜夜聞鐘警而彼此所遇如是人間之事實不可思議也

とあり、誠に惜むべきなり。今回遺族の手にある白藤書屋藏書目を見るに、墨付七十葉、諸子百家より歴史軍記隨筆雜劇院本に亘り、函數五十八に及ぶも、冊數を記入せざる書多きを以て正確なる數を算出し能はず。予は去年震災前神田今川小路の古書肆松雲堂に於て、

秋坪新語 十二卷八冊

浮槎山人戲編  
乾隆乙卯年鐫

を求めたるが、每卷頭に「鈴木氏」の朱印を捺し、朱、墨、藍を以て句讀、符箋及び書入を施せり。本の卷の卷首副葉に「鈴木恭字子敬號白藤俗稱岩次郎牛込山伏町」と墨書せる紙片を貼付せり。書目に所見なきを以て果して成恭の舊藏なるや否を知らず。

#### 八、成恭の撰文を刻める碑

成恭の詩文を輯録せしものも、予は未だ目にすることを得ず。詩は僅に一語一言、海録に載せられたるを知るのみ。頃日濱野知三郎氏所藏無題名の寫本にして、江都の金石文を蒐録するものを借覽し、偶

藏書家白藤として知られたる書物奉行鈴木岩次郎成恭の事蹟 (森)

(七)

七七

然成恭撰するところの碑文を發見せり。

石盥盤記（篆額）

白藏鈴木恭撰

石盥盤曩昔藤定家小倉山別莊所置石燈年代久遠僅存其蓋收于山下二尊寺覺性君之入東也請之寺僧輸致其邸回中爲盥盤噫此頑然者爲世至寶豈非物以人重哉藤公流風餘韻播于千載孰不欽仰覺性君所以視如夏鼎殷彝良有以也而恐後嗣之昧其來由或就湮滅故刻之石以詔之云

文化九年壬申夏五月立

向陵多賀谷瑛之書

並篆額

本書説明するところによれば、

青山原宿西側龍岩寺南隣松平左兵衛督石一萬下屋敷の庭にあり定家卿小倉山の別莊におはせし時土中

より掘出し手水鉢とし秘藏し給ひしを鷹司公深く懇望し給ひ讓請て貳百餘年公の家に秘藏し給へり一體は燈籠の笠石の四角なるを見立て仰向て手水鉢にしたるもの也然るに 有徳院殿の御代鷹司公より當屋敷へ讓與し給へり當左兵衛督先祖は四位少將藤原信平とて鷹司公の男なればなり。

右手水鉢の十間計へだてゝ小山の上に希代の青石に手水鉢の記を刻す。

而して手水鉢は四方「四尺二三寸ばかりの御影石」、碑石は「幅七尺餘高さ六尺餘厚壹尺計」なりとし

て各圖を示せり。龍岩寺は豊多摩郡千駄ヶ谷町原宿七十八番地に現存し、臨濟宗南禪寺末にして、古碧山と號す。府内八十八ヶ所の第九番、慶長七年の創建にかゝるといふ。松平左兵衛督は上野國吉井藩

○今の群馬縣  
多野郡吉井町

主にして、その祖信平は鷹司太閤信房の第四子、三代將軍家光の夫人滿姫の弟、慶安三年東下し、承應三年松平の稱號を賜ふ。三世信清寶永六年四月上野上總兩國に於て一萬石を賜ひて諸侯に列し、軍役その他の諸役を免じ、大廊下詰を命ぜらる。子孫相續ぎて明治に至り、十二世信謹の時姓を吉井と改む。十三世信寶明治十七年七月八日特旨を以て華族に列し子爵を授けらる。予一日龍岩寺を訪ひ、松平氏下屋敷のことを問ひしに、寺僧は元は見事なる庭もあり池もありしが、今は數十軒の小住宅建てられ、昔日の俤なしと語れり。予亦現場を踏査してその言を確め、定家卿遺愛の手水鉢、成恭撰文の大碑石も、破壊せしか、取去られて那邊に存するか、今その迹の知り難きを憾む。

## 九、成恭の交友

第七節に於て述べたる市島氏が圖書館雜誌掲載の「近藤正齋の半面」に引用せられたる夢蕉錄拔萃を見ても、該記が如何に、成恭日常の事を細叙せるかを知るに足るべく、その原本を讀めば交友間の消息を知ること、高田與清の擁書樓日記の如くならんも、未だその所在を知る能はざる今日は、唯予が貧弱なる見聞を以て三四の人物につきて記するを得るのみ。

書物奉行と同僚に就きては、第二節に近藤守重の事を記せしが、夢蕉錄拔萃を見てもその交情の親しかりしを推すべく、高橋作左衛門景保とは學問の方面を異にすといへども、景保も學者の事なれば同職として以外、多少の交誼はありしものと認めらる。今一人の夏目勇次郎成允は、その經歷一遍の武人に過ぎざれば、内面的交渉はあらざりしものゝ如し。

書物奉行は成恭任命の翌年文化十年八月二十五日西丸奥右筆藤井佐左衛門義知任ぜられしも、十二年六月二日病免し、夏目成允はその補缺として就任せしなり。近藤守重の後任は特命ありて補缺を見ず。成恭免職の跡は文政五年閏正月八日山角貞二郎久矩大番組より就任せり。久矩は奉行たる前昌平坂學問所に於て經書講釋手傳をなせしことあり。

大田蜀山は先輩として、山崎美成は後輩として、並びに交誼の深かりしことは、著作中屢成恭の事を引くを以て察知すべし。

濱野知三郎氏は余が成恭の事蹟探討の事を知り、その所藏にかゝる林大學頭衡、大槻盤水、伊澤蘭軒長島壽阿彌より成恭に贈りたる書牘を示されたり。大學頭衡の書簡は成恭が文化九年十一月二十四日書物奉行に任命せられたる四日後、即ち二十八日認めたるものにして、その全文左の如し。

小簡拜啓霜威甚敷候處彌御安意珍重奉存候然者此度ハ結構被仰付重疊日出度儀ニ奉存候此海鮮一籠輕微之至ニ御座候へとも任到來進覽之候誠ニ御祝詞申進候驗計ニ御座候登城前取込略紙亂毫御

海恕可被下候恐惶謹言

十一月廿八日

岩次郎様

大學頭

林家は世々幕府の學政を督し、紅葉山文庫の書目編纂には顧問の任に當る。衡は述齋と號し林家第八代にして中興の英才たり。述齋は近藤守重とも私的交誼深かりしことは、予が京都に在るの日守重が近江大溝に幽閉中接手せし知友の書簡を十二卷に裝成せしうち、三卷まで述齋の親書ありしを觀て之を知る。大槻盤水は仙臺藩士にして蘭學に達し、文政十年三月七十一歳を以て歿す。伊澤蘭軒は備後福山藩主阿部家の醫官にして、その詳傳は家兄故林太郎の記せしものあり。(二二二)長島壽阿彌も亦家兄の記あるを以て、俱に茲に略す。○その生歿は年譜に載す鈴木叢書の序を記したる饗座盈の事蹟は明ならず。

### 十、成夔の事蹟とその著書

鈴木家傳來書類第四號嘉永七年提出孫兵衛成夔の親類書の始めに、

文恭院様御代私儀父岩次郎小普請組酒井主馬支配之節天保十亥年八月四日從部屋住學問所出役被

仰付出役中十人扶持被下置候旨太田備後守

○老中  
資始

殿被仰渡候段奥田主馬申渡其後父岩次郎松平

美作守支配之節嘉永四亥年十二月病氣差重候ニ付跡式奉願置同月廿四日病死仕同五子年閏二月

四日奉願置候通跡式無相違被下置候旨於菊之間御老中御列座牧野備前守

○老中  
忠雅

殿被仰渡如父時

藏書家白藤として知られたる書物奉行鈴木岩次郎成恭の事蹟 (森)

(八一)

八一



小普請組松平美作守支配ニ罷成同年十二月病氣ニ付學問所出役 御免之儀奉願候處同月廿日願之通學問所教授方出役 御免被成候旨阿部伊勢守 ○老中 正弘 殿被仰渡候段美作守申渡同七寅年正月廿二日奥田主馬支配罷成候

と記せり。儒職歴任録には嘉永五年十二月十四日病氣に付出役御免とあり。

予は本年二月永井荷風氏より書簡を以て、同氏も鈴木成恭の事蹟を知らんと欲し、光照寺を訪問せられ、住職が桃野の「(二五)反古の裏書」の稿本を保管せることを聞き、予に通知せられたるを以て、一日同寺に詣てし之を見ることを得たり。稿本は半紙版にして七冊に分たれ、箱の表に

### 桃野先生遺稿

## 反古廻裏書

淨書本并に原稿 淨本四冊 稿本七冊

と認めあるも、淨書本は今傳はらず。第一冊に口繪四枚あり、第二冊の綴目の邊に「嘉永元戊申九月望後一日書ス」第五冊の同所に「嘉永三年庚戌雛祭る頃日永く月清らかなる日北に向へる窓の下に筆をとる」第七冊の卷首副葉に、

螳黠蟬癡同得失

男才女貌好因緣

半夜自書還自讀

燈火一爆落床前

詩瀑山人

⑩⑩

とあり。用紙はその名に背かず、すべて反古を裏返へしとして認めらる。學、庸、論、孟、易、書、詩禮と横に印刷し、「湯淺猪之助十七」等の文字あるを見れば、昌平坂學問所若しくは自宅に於て諸生に講義の際の出席簿ならん歟。

箱の中に稿本と共に略傳を認めたる一紙あり、左に之を寫す。

鈴木孫兵衛ハ舊幕府ノ人岩次郎號白藤ノ子ナリ諱ハ成夔字ハ一足桃野又詩瀑、慥亭ノ號アリ性寡言

ニシテ自ラ威嚴アリ幼ヨリ叔父多賀谷向陵翁ニ就キ書法ヲ學ビ其蘊ヲ極ム旁圖畫ヲ嗜ミテ山水ヲ

善クシ人物ハ鐘馗ノ像等ニ工ナリ又鐵筆ヲモ好ミテ頗ル其雅致ヲ得タリ讀書ハ内山壺太郎ヲ師ト

シ夙夜黽勉シ最詩文ニ妙ナリ武技ハ弓術ニ精シト云天保十己亥年八月十四日部屋住ヨリ昌平校ノ

教授トナリ自宅來學ノ生徒ニモ讀書并臨池ノ技ヲ教授セリ嘉永十一壬子年家ヲ嗣ギ同年甲府徵典

館學頭ノ命アラントスルニ先チ病ニ罹リ十一月五日遠逝ス享年五十有三牛込光照寺ノ塋域ニ葬ル

藏書家白藤として知られたる書物奉行鈴木岩次郎成恭の事蹟（森）

（八三）

八三

配遠山氏四男五女ヲ生ム早世スルモノ多シ二男成虎家ヲ嗣グ著書ハ隨筆體ナル反古裏書ナルモノ五冊アリ詩集ハ少壯時ノ作一冊アリ晩年ノ作ハ其稿ヲ秩ス。

附言孫兵衛ノ姉松子ハ古賀侗菴ノ配ニシテ謹一郎ノ實母ナリ。

この略傳は遺族の手に成りし由なれば最も信するに足るべきも、成夔の歿年月日は墓碑に刻する嘉永五年六月十五日を正しとすべきなり。後に擧ぐる成虎の履歷に安政二年三月二十三日病死と書せる如きは、當時の慣例にして、後繼者の都合等により喪を秘すること、早きは半歳、遅きは二三年に及ぶこと珍らしからざるなり。予は特にこの略傳の附言により、成恭の女にして古賀侗菴の妻となれる松子の名を知り得たるを喜ぶ。

反古の裏書は大正五年四月國書刊行會本鼠璞十種第一に三村清三郎氏の藏本によつて收めらる。その解題によれば淺野梅堂の批語ありといふ。

成夔の著書は反古の裏書の他に、予は先年濱野知三郎氏を経て、「無何有郷」<sup>(二六)</sup>三卷合一冊、醉桃菴襟筆<sup>(二七)</sup>二卷合一冊を得たるが、何れも裏書に類する隨筆なりき。

成夔の子八世成虎の經歷は、その提出せる書類に左の如く記せり。

私儀父孫兵衛小普請組松平美作守支配之節實子惣領彦太郎儀嘉永五子年十一月十日病死仕候ニ付次

男惣領仕度段奉願候處同六丑年正月廿七日願之通被

仰付旨阿部伊勢守

○老中  
正弘

殿被仰渡候段美作守

申渡奥田主馬支配之節安政二卯年三月病氣差重候ニ付跡式奉願同月廿三日病死仕同年六月四日願之通跡式無相違被下置旨於菊之間御老中御列座松平和泉守○老中 乘全殿被仰渡如父時小普請組奥田主馬支配ニ罷成小普請組能勢熊之助支配之節文久二戌年二月八日開成所翻譯筆記方出役被 仰付出役中五人扶持被下置候旨久世大和守○老中 廣周被仰渡候段熊之助申渡其後段々支配替小普請組高力直三郎支配之節慶應二寅年八月九日海軍奉行並支配罷成同三卯年十月廿四日御留守支配罷成候  
その明治二十九年十二月二十二日歿したるは墓石によりて知らるべし。

成虎の後は今牛込區北町に住するも、家に傳ふるは前記の書類のみなりといふ。

摺筆に臨みて先づ鈴木家に敬意を表し、傳來の秘書を研究のため提供せしめられたる光照寺住職小谷誠順師、所藏の書籍及び各種の資料の引用を承諾せられたる幸田成友、三村清三郎、濱野知三郎、高木文二郎の四氏、帝國圖書館に向ひて滿腔の謝意を捧ぐ。(大正一三、六、三〇稿)

### 鈴木成恭近親交友略年譜

明和四(一) 歲) 九月十五日成恭生る、字は士敬、通稱は岩次郎、號は白藤。

同 五(二) 歲) 六月二十三日松平熊藏乘衡生る、後に林家を嗣ぎ、大學頭衡と稱す、致仕後大内記と改む、述齋と號す。

○是歳長島壽阿彌生る。

同 六(三) 歲) 八月十一日父勘十郎成義死す、年二十八、○十一月六日成恭家督を相續す。

藏書家白藤として知られたる書物奉行鈴木岩次郎成恭の事蹟 (森)

(八五)

同 八 (五 歲) 是歲近藤守重生る、通稱は重藏、正齋と號す。

安永五 (十 歲) 七月三十日祖母岩田氏死す。

同 六 (十一 歲) 十一月十一日伊澤信恬生る、備後福山藩主阿部氏醫官、蘭軒と號す。

天明五 (十九 歲) 是歲高橋景保大阪に生る、通稱作左衛門、蠻無と號す。父は東岡先生高橋至時。

同 八 (二十二 歲) 正月二十三日古賀煜生る、字は季曄、侗庵と號す。父は精里先生古賀彌助樸。○七月二十六日成恭天守番と  
なる。

寛政八 (三十 歲) 是歲山崎美成生る、字は久卿、通稱は長崎屋新兵衛、北峰又好問堂と號す。

同 十二 (三十四 歲) 三月晦日成恭學問所勤番組頭となる。○十月六日手當七人扶持を賜ふ。○是歲長子成襲生る、字は一足、通  
稱孫兵衛、桃野又詩瀑と號す。

享和元 (三十五 歲) 四月二十四日成恭鎗術上覽に出技端物貳反を賜ふ。

文化四 (四十一 歲) 二月晦日近藤守重書物奉行に任ず。

同 六 (四十三 歲) 二月二十四日古賀煜儒者見習を命ぜられ、祿二百俵を賜ふ。

同 九 (四十六 歲) 十一月二十四日成恭書物奉行に任ず。

同 一〇 (四十七 歲) 八月二十五日藤井義知書物奉行に任ず。通稱佐左衛門。

同 一一 (四十八 歲) 二月三日高橋景保書物奉行に任ず。

同 一二 (四十九 歲) 六月書物奉行藤井義知病免す。○七月二十三日夏目成允書物奉行に任ず。通稱勇次郎。

同 一三 (五十 歲) 成恭是歲より夢蕉録を執筆し始む。○古賀煜の長子増生る、通稱謹一郎、後筑後守と改む、茶溪と號す。

- 同 一 四 (五十一歳) 七月二十六日古賀煜儒者に任ず。
- 文政元 (五十二歳) 成義五十年忌、八月墓石を改修す。
- 同 二 (五十三歳) 二月三日近藤守重大阪弓奉行に轉ず。
- 同 四 (五十五歳) 二月二日夏目成允膳奉行に轉ず。○三月近藤守重勤方不相應を以て免職小普請に入る。○十二月二十四日成  
恭免職、翌日差控を命ぜらる。
- 同 五 (五十六歳) 閏正月八日山角定矩書物奉行に任ず、通稱貞一郎。○十四日成恭差控を許さる。
- 同 八 (五十九歳) 四月六日大田南畝死す、年七十七。
- 同 九 (六十歳) 十月六日近藤守重近江大濰藩に預けらる。
- 同 一 〇 (六十一歳) 三月晦日大槻盤水死す、年七十一。
- 同 一 一 (六十二歳) 十月三日高橋景保罪を獲て獄に下る。
- 同 一 二 (六十三歳) 二月十六日高橋景保獄中に死す、年五十三。○六月九日近藤守重大溝に死す、年五十九。
- 天保元 (六十四歳) 是歳成夔の長子成龍生る。通稱彦太郎。
- 同 二 (六十五歳) 是歳成夔次子成虎生る。通稱五一。
- 同 四 (六十七歳) 十二月四日成恭の生母内海氏死す。年未詳。
- 同 八 (七十一歳) 四月二十日成恭の妻多賀谷氏死す。年未詳。
- 同 一 〇 (七十三歳) 八月四日成夔部屋住より學問所教授方出役に召出さる。
- 同 一 二 (七十五歳) 三月十六日古賀煜布衣仰付られ、役料百俵を賜ふ。○七月十三日林大内記衡卒す、年七十四。牛込山伏町塋

域に葬る。諡して快烈と號す。

弘化四 (八十一歳) 正月晦日古賀焔死す、年六十。小石川大塚坂下町墓地○舊稱に葬る。  
御厩島

嘉永元 (八十二歳) 八月二十九日長島壽阿彌死す、年八十。

同 四 (八十五歳) 十二月六日成恭死す、年八十五○表向二  
十四日死

同 五 (歿後一年) 閏二月四日成夔家督を相續す。○十一月十日成龍死す、年二十二。○十五日成夔死す、年五十三○表向十二  
月二十日出

役を免ぜられ安政二  
年三月二十四日死

安政二 (歿後四年) 六月四日成虎家督を相續す。

同 三 (歿後五年) 七月二十日山崎美成死す、年六十一。

同 五 (歿後七年) 五月二十四日夏目成允死す。

文久二 (歿後十一年) 二月八日成虎開成所翻譯筆記方出役となり、五人扶持を賜ふ。

明治二九 十二月十二日成虎死す、年未詳。

参 考 書 目

○特に所藏者を記  
さざるは家藏なり

(一) 一記一言 五十册 大田南畝編 明治十六年刊。

(二) 大日本人名辭書 第六版一册 經濟雜誌社版。

(三) 香亭雅談 二卷 香亭中根淑著 明治十九年金港堂版。

(四) 武鑑 須原屋出雲寺の二版あり。

- (五) 好古類纂第二編第二集 好古社刊。
- (六) 吏徵 寫本五卷 向山源大夫篤著 本錄二卷別錄二卷附錄一卷に分つ。凡例にこの異同は限るに弘化二年十月を以てすといふ。
- (七) 鈴木成義碑銘拓本 一幅。
- (八) 鈴木家傳來書類 六種 説明本文にあり。
- (九) 奠香錄 版本一冊 著作者出版年月とも不明、凡例及び跋文を按ずるに淨土宗殊に芝三緣山増上寺關係の僧侶の手に成れるが如し。徳川宗家、三家、三卿その他一門及びその生母夫人の法號、葬地、薨年月を朔日より三十日に係けて列擧せり。
- (一〇) 文恭院殿御實紀 經濟雜誌社本續徳川實紀第一編 明治三十八年刊。
- (一一) 海錄 二十卷 山崎美成著 國書刊行會本 大正四年刊。
- (一二) 寒檠瓊綴 六卷 梅堂淺野長祚著 藝苑叢書本。
- (一三) 穀堂遺稿抄 八卷四冊 穀堂古賀燾著 天保十五年刊。文部は潛窩文章、詩部は琴鶴堂詩鈔と題す。
- (一四) 光照寺過去帳 六卷 光照寺藏。
- (一五) 鈴木恭隨筆 寫本四十四冊 鈴木成恭編 南葵文庫藏。
- (一六) 鈴木叢書 寫本十四冊 鈴木成恭編 帝國圖書館藏。
- (一七) 楓山書倉邸抄 寫本一卷 幸田成友氏藏。
- (一八) 漱芳閣叢書料 寫本三十二冊 淺野梅堂編 帝國圖書館藏。
- (一九) 圖書館雜誌第三、四號 日本圖書館協會 明治四十一年發行。
- (二〇) 無題名寫本 一冊 濱野知三郎氏藏。

藏書家白藤として知られたる書物奉行鈴木岩次郎成恭の事蹟 (森)



(二一) 正齋雲霧集 十二卷 野田東三郎氏藏。

(二二) 伊澤蘭軒 森林太郎著 大正五年六月より六年九月まで東京日日、大阪毎日兩新聞に連載、大正十二年六月鷗外全集第八卷に収録す。

(二三) 壽阿彌の手紙 森林太郎著 大正五年五月六日より六月二十四日まで東京日日、大阪毎日兩新聞に連載、八年十二月山房札記に收めて出版、十二年四月更に鷗外全集第七卷に收む。

(二四) 儒職歷任錄 明治二十五年文部省出版日本教育資料卷十九に收む。

(二五) 反古の裏書原稿 鈴木成夔自筆 鈴木家傳來。國書刊行會本鼠璞十種第一にも收む。

(二六) 無何有郷 寫本一冊 鈴木成夔著。

(二七) 醉桃菴襍筆 寫本一冊 鈴木成夔著。

森 潤 三 郎